

カードファイト!!ヴァンガード ～転生した先導者～

十六夜翔

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

生前、環境にも友人にも恵まれなかった青年は、事故による転生で天城ハルトとして新たな生命として誕生した。

生前とは正反対の人生を送っていた彼は生前とは違うことに戸惑った。そして誰よりも早くに覚醒した力に苦悩する彼の壮絶な物語。

目次

Episode 0	プロローグ	1
Episode 1	天城ハルト	4
Episode 2	ショップ大会	10

## Episode 0 ～プロローグ～

『カードファイト!!ヴァンガード』それは数あるTCGの中の1つ。デュエマや遊戯王にも負けないぐらい人気の高いカードゲーム。これはある青年の物語…

「くああ〜…ふう」

この青年は今高校三年生、俗に言う受験生。そんな彼の日常は学校に帰れば『飯食って、シミュレーションして、寝る。ファイターの鍛錬はそれで十分よ!!』まるでOTONAな思考をしている彼は環境が悪く、近くにカードショップもファイトできる場所もなければ、一緒にファイトしてくれる友達がない。

「(大学は都会に行つてヴァンガードファイトしまくつてやる!!)」

彼は夢見ていた。いつかファイトできる友人や強敵ができることを。

「(あ、そう言えば新しいパックが出るつて言つてたな。今度の休み少し遠出して買いに行こ。それとシャドパラもうちょっと改良しよ)」

彼は夢を叶えるまでもう少しの所まで来ていた。

「(そう言えば今日はGの放送日か、早く帰ろー)」

「坊主危ねえ!!」

「え?..」

彼は振り返つてしまった。そのまま気にせず歩いていれば何事も起きなかったのに彼は止まってしまった。瞬間彼は途轍もない衝撃

に襲われる。

「ああ、くそ。こんな所で死ぬのかよ……1度でもいいから誰かとファイトがしたかったなあ……」

彼の意識は消えていく。彼の死因は被疑者の居眠り運転での追突事故だった。

彼の夢はここで潰えるはずだった……

赤ちゃんの泣き声が聞こえる。

「うるせえな、静かに眠らせろよ……」

それでも泣き止まない。すると青年(?)は気がつく

「(あれ?意識がある……死に損なったか?)」

青年(?)は目を開けようとするがあまりの眩しさに目がくらむ。暫くすれば光に慣れ、目を開けると見知らぬ天井が見える。

「(知らない天井だ、俺は……寝ているのか?そうだ声は……)」

「あ……(は?)」

見知らぬ声に驚く青年(?)は体が小さく手も足も小さくなっていった。

「あうあう、だあく〜あい!! (赤ちゃんになってるう〜!!)」

「あなた!! ハルトが起きてるわ!!」

「なに!? ハルト〜パパですよ〜」

「ママですよ〜」

「どうだろう、ああくあい!! (どうなってるんだ〜!!)」

「あら、元気ね〜」

「元気なのはいい事だな、あっはっはっは!!」

父さん、母さん。違う、そうじゃない。てか本当にどうなってるんだこれ〜!!

これから始まるのは転生者の少年、天城ハルトあまぎのすれ違いと熱意と苦悩を綴ったカードファイトの物語である。

↳ t o b e c o n t i n u e d ‹

## Episode1 天城ハルト

声が聞こえる

——戦え、戦うのだ我が主——

またお前か、2年前にも言っただろ、俺はもうファイトはしないって

——新たな持ち主が現れた、まだ力が芽吹いただけに過ぎないが——

——だからなんだよ、どこの誰がPSYクオリアを発現させたとして俺には関係ない。

——お主もPSYクオリアの持ち主、いずれ出会う運命にある——

たとえ会ったとしても俺はもうファイターじゃない

——まあいいだろう、いずれ我々と共に戦うことになるだろう。これはもはや運命だ——

失せろブラスター・ダーク

——ふっ、またいずれ会おう我が主——

「はあ…またか…」

ベッドから起き上がり洗面台に向かう。顔を洗い自分の顔を鏡でみる。白い髪に紅い眼に可も不可もない顔、俗に言うアルビノ体質のこの顔

「っ!!」パリーン!!

思いっきり鏡を殴りつける。握った拳と割れた鏡の隙間に見えた自分の口元は歪に嗤っていた。

「学校行く……」

割れた鏡をそのままにし、制服に着替え家を出る。

「あ、ハルト……おはよ」

「ミサキか、おはよ」

戸倉ミサキ、うちの隣にあるカードキャピタルで店長をやっている新田シンさんの姪っ子。んで俺の幼馴染。

「早く行く」

「おう」

暫く歩いてると隣から偶に視線を感じる。

「なに?」

「おじさんとおばさんは元気?」

「ん?ああ、この前、フランス語で「アメリカで元気にしてる」って言う手紙がマチュピチュの写真と一緒に入った封筒がロシアから届いた」

「相変わらず 世界中を飛び回ってるんだね」



「たまに電話がかかってくるけどいつも新婚のような感じだよ」

「羨ましい」

「そうか？」

「そうだよ、夫婦仲がいいっていい事じゃん。私もそんな夫婦になりたいな」

「そうか、頑張れ」

「む」

「なんだよ」

「別に…ほらさつさと行くよ」

「あ、おい。ミサキ!!」

手を引かれ宮地学園の門を潜る。

授業が終わればあとは帰るだけ、帰るだけなんだが…

「俺たち登下校いつも一緒だよな」

「しよがないでしよ、家が隣なんだから」

「それもそっか…」

「今日はどうする、うちで晩御飯食べていく?」

「そう毎日ご馳走してもらっちゃシンさんに悪いよ」

「ふーん…」

「なに?」

「別に、シンさんには3人分って言つとくから」

「なんか、俺がお前ん家でメシ食う流れになってるが…まあいいか、わかった」

「そ…あ、カードキャピタルには?なんか強いファイターを探してるお客さんがいたけど…」

「だから言つたら、俺はもうファイターじゃないって、カードキャピタルはまた今度な」

「わかった、それじゃまた後で」

「ああ」

家に辿り着き、ミサキと別れの挨拶をして家に入る。家に入れば途端に静かになる。洗面台の鏡は割れたまま。それを無視し自室にある鍵のかかった机の引き出しを開ける。

そこには白のデツキケースと黒のデツキケースがある。白の先頭には星輝兵<sup>スターベイター</sup>ネビュラロード・ドラゴンが、黒の先頭にはファントム・ブラスター・ドラゴンが入っている。ケースを片付け、引き出しを閉め、そのままベッドに飛び込み目を閉じる。

「ああ…眠い」

意識がどんどん落ちていこうとするのだが…

「おい、權トシキ!!もう一度俺とファイトしろ!!」

外からバカでかい声が聞こえたせいで目が覚めた。

「つたくどこの馬鹿だ」

カードキャピタルはいつも賑やかだなとか思いながら再び目を閉じ眠りにつこうとしたが…

「返してよ森川君!!大切なカードなんだ!!」

俺に宿るPSYクオリアがさっきの少年の声に反応し俺は完全に目を覚ます。

「くっそ、まったくなんだってんだよ」

制服を脱ぎラフな姿で家を出て隣のカードキャピタルに向かう。

「いらっしや…あ、来たんだ」

「あんだけ外で騒がれたら寝るに寝られねえからな」

「それもそっか…」

ミサキの視線の方へ見ると、後江高校の制服を着た男と後江中学の制服を着ていた男の子がファイトしていた。

「にや〜」

「お、久しぶりだな店長代理」

「にや〜」

店長代理の喉元を撫でていると

「立ち上がれ僕の分身!!ブラスター・ブレード!!」

どうやら中学の坊やはG2のブラスター・ブレードにライドしたよ  
うだ

「へえ、ブラスター・ブレードね…珍しいもの持つてんな」

「ふふっ」

「なんだよ」

「別に、あんだけ自分はファイターじゃないとか言いながらちやつかりあそこのファイトに釘付けじゃない」

「ライド・ザ・ヴァンガード! この世の全てのものを焼き尽くす黙示録の炎! ドラゴニック・オーバーロード!」

高校生の方はカゲロウデツキだった

「やっぱりファイターには戻らないの?」

「お前こそ、カードショップの店員やっておいてファイトしねえの?」

「私は、あんたのファイト見てるだけで十分だったから。」

「そうか」

どうやらあのファイトは中学坊やの勝利で終わったらしい。

「どうやら終わったらしいな」

「そうだね、どうするの? 一旦帰る?」

「いや、どうせお前ん家で食うんだ、店閉めるまでここにいます」

「どうせならファイトしていく?」

「冗談よせよ」

店が閉まるまで店長代理を撫でながらミサキと他愛ない会話をしていた。夜はシンさんの料理に舌つつみをうち、夜はベッドに飛び込み眠りについた……

↳ t o b e c o n t i n u e d ‹

## Episode 2 ～ ショップ大会 ～

最近、カードキャピタルが賑やかだ

「ショップ大会？」

学校の帰り、いつものように隣にはミサキがいる。

「そう、なんかシンさんが張り切ってる」

「シンさんそう言うの好きそうだよな、んでお前は出んの？」

「なんでそんなこと聞くの？」

「いや、なんか最近お前もファイト始めたって言うから」

「アイチと一回ファイトしただけ」

「アイチ？」

「先導アイチ。ほら、この前あんたが来た時にいたじゃん。プラスター・ブレードにライドしてた子」

「ああ、あの中学生坊主か…なんだ、惚れたのか？」

「はあ？」

明らかに「何馬鹿なことやってんの？」みたいな顔をされる

「なんだ、違うのか」

「当たり前でしょ、あの子中学生よ？」

「言うて一つしか変わんねえんだろ？」

「だからそんなんじゃないって」

「そうなのか」

「とにかく!! ショップ大会には私も出るようになったから応援してよね」

「おう、頑張れよ」

「またね」

「またな」

家に着いたから別れる。朝は一緒に登校して帰りは一緒に下校する。まあ幼馴染でお隣さんだから仕方ないのだが、ミサキはああ言う性格してるからなかなかいい人が現れない。顔はいいし家事能力はそこそこあるから悪くは無いいと思うんだけど。それにしても…

「シヨップ大会か…いやいや」

出られるわけないじゃないか、このデツキじゃ…

今日はいつもより隣が騒がしい。

「ああ…そういえば今日か…」

ベッドから立ち上がり、鏡の割れた洗面台で顔を洗い、制服じゃなくて私服に着替え、朝食の準備をする。

「米は昨日炊いたから…」

冷蔵庫から卵とベーコン、味噌と豆腐を取りだし、常温室からカットわかめを野菜室からエノキを取り出して料理する。

朝食を食べ終えカードキャピタルに向かう。

「シンさん、来たよ」

「いらっしやい、ハルト」

店に入れば先ずはこの店の店長である新田シンに挨拶をする。

「今回の注目ファイターは？」

「四人かな…」

四人…結構いるな

「一人目は權トシキ君。今のところ高校生最強は彼ですかね」

なんか「今のところ」って部分が強調されたが、聞かなかったことにしよう。

「他は？」

「二人目は葛木カムイ君。高火力で押せ押せな今注目の小学生ファイターです。」

へー…今は小学生にもファイターがいるんだな

「3人目は先導アイチ君」

「先導アイチ…」

「おや、お知り合いですか？」

「いや、この前ミサキの口からその名前が出たなって覚えてただけだ」  
「そうですか…実は彼、始めたのはつい最近でして。急成長中のファイターです」

先導アイチの方を向くとなんだか顔が強ばっていた

「(なんだあれ？緊張してんのか?)」

「そして最後はやはり、ミサキですね!!」

「シンさん、ミサキのことになると急にテンション上がるよね」

「おや、ハルトだって同じじゃないですか」

「いや、俺はただ…」

「大丈夫ですよ。ゆっくりではありませんがちゃんと前を見えています」

よ。」

ミサキは両親がいなくなってからファイトをやるうとはしなかったが…この話はまたいずれしよう。

「どうですか？ハルトも参加しますか？」

「いや、締め切ってるんだろ？今更行ったところでどうにかなる問題か？まあやる気はないんだが」

「そうですか…残念です。あ、そろそろ時間ですね。ではまた後で」

素晴らしいシンさんは会場の方へ向かい、声をかける。

カードキャピタルのショップ大会が幕を開けた。

↳ t o b e c o n t i n u e d ↳